

## 平成二十九年年度富山県立大学入学式式辞

平成二十九年四月六日（木）

アイザック 小杉文化ホール ラポール

四百五十一名の新入生の皆さん、そして、ご家族の皆様、ご入学おめでとうございます。私たち教職員は、心から皆さんのご入学を歓迎いたします。

また、本日は、石井富山県知事をはじめ、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜りました。心からお礼を申し上げます。

まず、学部新入生の皆さんにお話しします。

皆さんは、高い競争倍率の本学入学試験に見事合格し、めでたく本日の入学式を迎えられました。こうして選ばれた皆さんは、自ら研鑽に励み、地域、そして我が国の発展を担う人財として立派に成長し、社会に貢献することが期待されています。

皆さんを迎える本学は、人間性豊かで創造力を備え、社会に貢献する人財を育成し、また学術と産業との有機的連携を進め、もって地域及び社会の発展に貢献することを目的に設立された、創設から二十八年目のまだ若い大学です。工学の知識だけでなく、それを生かす上で必要となる高い知性や人間性を備えた優れた技術者や研究者を育てることを基本的理念としています。

本学は、富山県の知の拠点となるべく、地域の課題やニーズに的確に応えるとともに、優れて世界的な研究も展開しており、併せて学生の能力を大きく伸ばす行き届いた教育を行っています。こうしたことにより本学が「地域に貢献する大学」や「就職に強い大学」として高い評価を受けていることは、皆さんよくご存知のことと思います。

本学は、一昨年四月の公立大学法人化に伴い、県内産業への人材供給と若者の定着に貢献し、一層魅力ある大学となるよう、学科の新設や拡充を進めており、昨年4月には、機械システム工学科及び知能デザイン工学科の入学定員の増員を行いました。また本年4月には工学部では全国初となる医薬品工学科を新設するとともに、情報システム工学科と環境工学科について、入学定員の増員と教育研究分野の充実・強化を行い、学科の名称をそれぞれ、電子・情報工学科と環境・社会基盤工学科に変更いたしました。これらの拡充により、二年間で、百名の入学定員の増員を行ったところです。

さらに平成三十一年度の看護学部の創設に向けて、キャンパスの整備や教員採用の準備を進めるなど、富山県立大学は地域の知の拠点として、ますます発展していきます。

これらの拡充計画については、石井富山県知事をはじめ県関係者、県民、県議会

議員の皆様など、多くの皆様の温かいご理解とご支援のおかげであり、改めて感謝申し上げます。このような皆様のご期待に応えるべく、本学では、数々の行き届いた教育を実践しています。

例えば、一年次の対話型の教養ゼミに始まり、四年次の卒業研究に至るまで、すべての学年で少人数の学生と教員とが触れ合う場を提供しています。さらに、全学年を通して、環境リテラシーを育む環境教育プログラム、そして学生の自立を促すキャリア教育を実施しています。

このような体系化されたプログラム等によりまして、専門知識だけでなく、それを活用するのに必要となる広い視野やコミュニケーション能力、正解のない問題に取り組んで行く力と使命感などが養われるものと考えています。

本学のキャッチコピーである、「工学心」という言葉には、「工学を志す」という意味が込められており、二十一世紀の課題に、エンジニアとして果敢に挑戦する若者が数多く生まれることを期待している言葉です。この期待に応えるために、院生も含めた皆さんにお願いをしたいと思います。

皆さんは、優れたエンジニア、あるいはリサーチャーになることを志して本学に入学されたことと思います。その初心を決して忘れないでください。

皆さんは、その志の実現のために、これから、本学において、勉学に励むこととなりますが、覚えておいてほしいことがあります。

まず、毎日の学習という一步一步のたゆまぬ努力をしてほしいということです。大学では、「試験前の一夜漬け」などは通用しません。国が定めている大学設置基準では、皆さんが、一科目の単位を修得するためには、実際の講義時間に加え、その二倍の時間に相当する自宅等での関連学習が必要であるとされています。

こうした地道な努力により、講義の狙いを的確に把握し、体系的にものごとを捉え、より具体的な課題を認識することができるようになり、また、その過程で獲得された知識が集積され、さらに、クリティカル・シンキング（critical thinking＝批判的思考）する力が養われると思います。

グローバル化が進展し、多くの県内企業が海外展開を進めているなかで、グローバル人材の育成が求められています。

皆さんには、学部の場合は4年、大学院の場合は、2年ないし5年の間に、是非グローバル人材として成長したいという強い意志を持っていただきたいのです。グローバルというと、英語がペラペラ話せるという意味にとる方が多いですが、カタコトでもいいので、自分の考えを簡単にまとめて言えるようになってほしいということです。

この場合に、日本人の誰もが持っている「恥ずかしい」という気持ちを抑制し、よい意味での積極型人間になる努力をお願いしたいと思います。

「出る杭はうたれる」とのことわざもありますが、昔から、日本では、とかく積極型の人間を、その一部分のみをとらえて、批判する傾向があります。ただ、これはグローバル人材を育成しようとするときに「邪魔」になるのです。特に、

外国での会議、あるいは外国人が出席している会議で、沈黙していると、「私はこの会議は不満です」という意味に誤解され、損することがあります。または、「サッカーで一度もボールに触れない」に等しいともいわれます。ただし、日本伝統の「奥ゆかしさ」は抑制する必要はないかもしれません。

本学では、グローバル人材やコミュニケーション能力の高い人材を育成するために、海外語学研修や交換留学制度あるいは英語サロンといったプログラムを設けるなど、「良い意味での積極性」が養える機会を多く提供しています。

ただ、英語での会議で発言できるようにするためには、まず日本語の会議で発言できないと埒があきません。

皆さんには、これから普段の講義以外に、著名な方の特別講義や、講演を聴講できる機会が多くあります。その際、講演が終わったら、必ず一つは質問をしようという態度で聴講してほしいのです。発言するのに「恥ずかしい」ということはありません。これは、教えてできることではなく、本人の自覚を促すしかないのです。

大学院では、指導教員に、院生が国際学会で発表する機会を作るようお願いしています。また、教員もその期待によく答えてくれています。ただし、このような機会を設けても、皆さんがそれを利用しようと努力しないと無駄になります。

禪に「啐啄同時」という言葉があります。鶏の雛が卵から生まれ出ようとするとき、殻の中から卵の殻をつついて音をたてます。これを「啐」と言います。そのとき、すかさず親鳥が外から殻をついばんで破る、これを「啄」と言います。そしてこの「啐」と「啄」が同時であってはじめて、殻が破れて雛が産まれるわけです。これを「啐啄同時」と言います。これは鶏に限らず、師匠と弟子。親と子、さらには大学と学生の関係にも学ぶべき大切な言葉です。

大学生活においては、同じ目標を持つ多くの学友と生活を共にし、教職員と触れ合う機会も多いと思います。また、逆に意見の異なる人といろんな協議や折衝を行って、自分の考えを理解してもらったり、逆に自分の考えを修正したりすることもあるかと思います。このような他人との交流は皆さんの大学生活を豊かで充実したものにしてくれるばかりでなく、皆さんを人間的にも成長させてくれることと思います。

皆さんの前途にはたくさんの方がやりのある仕事があります。皆さんの将来には明るいものがあります。

初心を忘れず、将来優れたエンジニアやリサーチャーとして社会に積極的に貢献するという夢や志を持って、これからの大学生活を有意義に送られることを、心から祈念し、式辞といたします。

平成二十九年四月六日（木）

富山県立大学 学長 石塚 勝